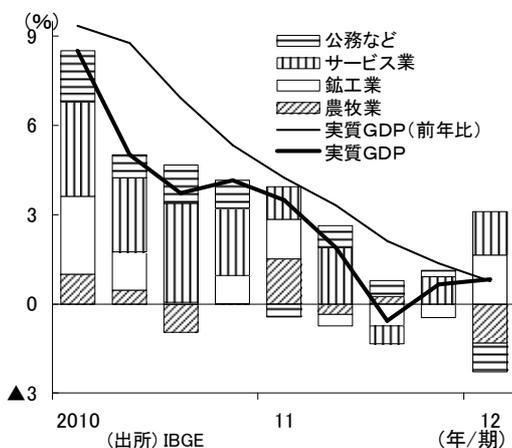


ラニーニャでブラジル減速

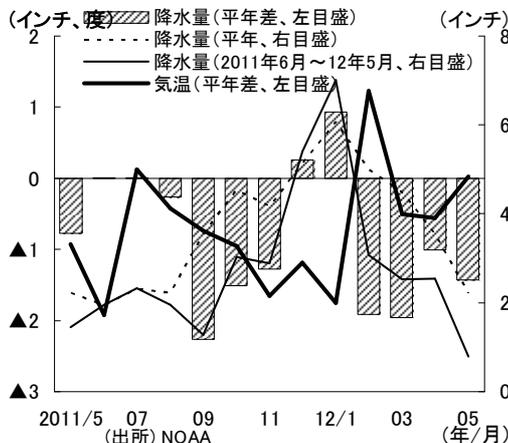
～ 実勢は底堅く、4～6月期から巡航速度に復帰へ ～

- ブラジル経済が一段と減速。前年比でみた実質経済成長率は2010年1～3月期の9.1%をピークに期を追って鈍化(図表1)。本年1～3月期には0.7%とほぼゼロ成長へ。本年の成長率を3%台から2%前後に引き下げるなど、先行きを慎重にみる見方も台頭。しかし季調系列をみると、最悪期は昨年7～9月期の年率成長率▲0.6%で、10～12月期に0.7%、本年1～3月期は0.8%とプラス成長に。さらに産業別にみると、ラニーニャに直撃され収穫減に見舞われた農業が深刻な落ち込み。一方、鉱工業やサービス業は好調。寄与度を10～12月期と対比すると鉱工業が▲0.4%から+1.6%、サービス業は+0.9%から+1.5%へ。なお鉱工業の牽引役は製造業と建設業。産業高度化が着実に進展。
- 当面の焦点は農業。低温と少雨のラニーニャは昨秋から今春がピークですでに峠越え(図表2)。気温は本年5月、平年並み。降水不足も南部パラナ州など一部を除けば、4月以降、次第に解消へ。小麦やコーンをはじめ、本年の同国収穫量は大幅増加の見通し。天候問題が後退すれば、とりわけ4～6月期を中心に反動増で景気押し上げに作用する筋合い。
- 底堅い内需に加え、昨年央以降、外需も景気牽引。急激なレアル高で昨年入り後、輸出は頭打ち(図表3)。しかし昨秋来のレアル高修正に伴い輸出が再び盛り上がり。輸入は景気減速を映じて一進一退。実質貿易黒字は昨年央から期を追って増加。
- 加えて、インフラ整備や民間投資を左右する外資流入が引き続き高水準(図表4)。やや細かくみると、昨春以降、10年後半比やや弱りが広がったものの、本年入り後、再び力強い流入。1～3月期の直接投資は204億ドルと昨年1～3月期207億ドル以来、1年振りの200億ドル台。一方、経常収支の赤字幅も1～3月期121億ドルに縮小。もっとも根強い海外旅行ブーム下、旅行収支の赤字幅拡大傾向持続。良好な所得雇用環境のもと力強い消費動向を示唆。要すれば、同国経済は4～6月期以降、巡航速度に復帰するなか、ラニーニャの反動効果も加わり、再び3%台の成長軌道に戻る公算大。

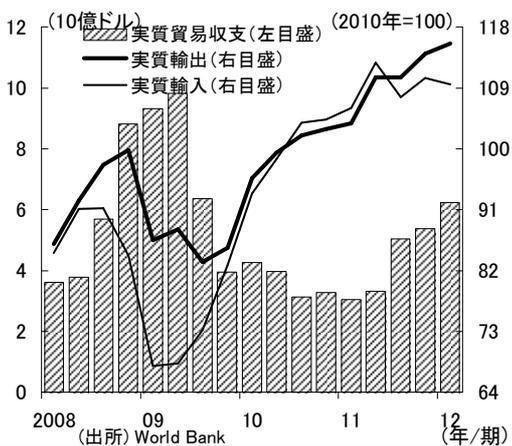
(図表1) ブラジル実質経済成長率(季調済年率)



(図表2) 降水量と気温(除く北部・北東部)



(図表3) 実質貿易収支と実質輸出入(季調済)



(図表4) 対内対外直接投資と経常収支

